

1・昭和42年10月

舞台は浅岡家。

浅岡光太郎（40才）は念願の一戸建てを建てる。

家族は光太郎、妻の正子（33才）、長男の弘（12才）、

光太郎の母ふみえ（70才）、そして正子は妊娠中である。

今日はその入居の日。

居間には、まだ梱包されている荷物が雑然と置かれている。

縁側が広がっていて、庭がけっこう広い。

庭に沿った垣根に出入り口があって、裏（隣家）に通じている。

光太郎が、最後の荷物を運び終える。

疲れた様子で、縁側に腰掛ける。

光太郎の弟の洋二郎が「好きさ、好きさ、好きさ、忘れられないん

だ」と鼻歌を歌いながら二階から下りてくる。

洋二郎 「(高音で) お前のすべて〜！」

光太郎 「うるさいよ！」

洋二郎 「ごめんごめん、とりあえず上も運び終えたから。」

光太郎 「おう、悪いな。」

洋二郎 「荷物、ほどこいた方がいい？」

光太郎 「あとでいいよ。お前もちよつと休め。」

洋二郎 「そうだね。さすがにちよつと疲れた。」

光太郎 「もう40だからな。」

洋二郎 「まだ37だよ。」

光太郎 「似たようなもんだ。」

洋二郎 「違うね。(座ろうとして) いてて、腰が。」

光太郎 「ほら、言わんこっちゃやない。」

洋二郎 「ほんとだな。」

二人、笑う。

洋二郎 「はあり、しかし、いい家だね。」

光太郎 「そうだろ。」

洋二郎 「すごいなあ、一国一城の主か。」

光太郎 「ああ、すごいだろ。」

洋二郎 「ほんと、すげーや。」

光太郎 「ああ、すごいだろ。」

光太郎は上機嫌である。

庭先から、光太郎の部下の田所が入ってくる。

田所 「荷物、全部運び終わったみたいですね。」

光太郎 「悪かったな、田所。こんなこと手伝わせて。」

田所 「とんでもないです。お役に立てたかどうか。」

光太郎 「大助かりだよ。」

田所 「そりゃよかった。・・・いやー、しかし、ほんと素敵なお家ですね。」

光太郎 「・・・そう？」

田所 「さすが課長、ご立派です。こんな家を建てられるなんて。」

光太郎 「そうかなあ。」

田所 「いや、すごいですよ、ほんと（涙ぐむ）。」

洋二郎 「なんで田所さんが泣くの？」

田所 「だってだって……。」

光太郎 「こいつは感激屋なんだよ。」

田所 「だって、すごいじゃないですか。うちのようないきな会社だったら、

課長って言ったって給料なんて微々たるものです。そんな安サラリーをやりくりして、こんなすごい家を建てちゃうんだから。」

光太郎 「それって褒めてるのかな？」

田所 「さすが飲みに行っても、いつも割り勘にしてただけあります。」

光太郎 「けなしてるだろ、それ。」

田所 「そんなわけないじゃないですか。私ら若手社員に希望を持たせてくれたんですよ、課長は。」

光太郎 「だったらいいんだけど。」

田所 「尊敬してる課長だけあります。いや、ほんと素晴らしい。」

光太郎 「まあ、たしかに素晴らしいよなあ。」

田所 「はい。」

光太郎 「俺ってすごいんだよなあ。」

田所 「その通りです。」

光太郎 「そうだよなあ。」

洋二郎 「上機嫌にもほどがあるな。」

光太郎 「なんか言ったか？」